

八剣山の会春秋

秋季号

平成26年9月20日

「八剣山の会春秋・編集部」発行



＜秋の山路＞ 画：小西益樹

東北旅行（鳥海山登山）報告（8月4日～7日 参加7名）

安田享

○1日目 榛原駅5時17分発（早朝でバスはなく自宅より徒歩）。関空よりなじみとなったLCC（格安航空）ピーチで仙台に飛び、2台のレンタカーに分乗し一路、鳥海山を目指す。（初日の宿泊は、鳥海山中腹の太平山荘）

生憎の雨模様。仙台から奥羽山脈を越えると山形盆地である。今回の旅行で知ったが、山形市は、奥羽山脈と出羽山地に挟まれた盆地で最上川が流れ、秋田市は、日本海に面した平野で、鳥海山は、両県の県境にある大きな裾野を持つ独立的峰（2236m）。別名出羽富士。

寒河江川^{さがえがわ}を渡り、出羽三山の信仰の山、月山を横にみて進むと米どころ庄内平野に出た。海が見える。日本海。麓町、遊佐で昼食。鳥海山の大きな山麓に入るが登るにつれ降雨で視界は、悪化。雨に煙るブナ林を進み、太平山荘に着く。宿舎から日本海の離島「飛島」に夕日が沈む景色が良かった。明日の登山を祈り眠りにつく。

○2日目 起床。天気予報どおり雨。あきらめきれず、車で鳥海ブルーラインを更に700m進み登山口まで進む。登山口で休憩し、途中のお花畑のある展望台までもと天候の回復を待つ。下山してくる人からは、雨霧で花は、見えない。上の方は、気象条件がより悪い。登人は、いない。との話。登山を断念。残念。

計画を変更して下山し、鳥海の恵みである元滝伏流水と獅子ヶ鼻湿原（ともに名水百選）を見学。元滝伏流水は、壁のような山肌から重層的に伏流水が大量に湧き出ており、その水量だけで川となっている。苔の緑と伏流水の飛沫^{しぶき}の白とのコントラストが圧巻。獅子ヶ鼻湿原のある中島台を散策した。（5キロ、2時間半の散策路。）ブナの巨木、原生林、奇形木群とマリモも生息する鳥海の伏流水（獅子ヶ鼻湿原）。湧水に恵まれた大自然の博物館。湧水の量がすごい。沼津市にある富士山の湧水、柿田川のような。東北電力の表示があったのでこの水力を活用しているようだ？ また多種多量の苔は、濃いグリーン of 絨毯のようだ。鳥海の豊かさ、奥行きを感じた。

その後象潟町^{きさかた}（秋田県にかほ市）に移動。象潟は、松尾芭蕉が奥の細道で訪れた最北の地。小林一茶や正岡子規も訪れている風光明媚の地。道の駅「ねむの丘」の展望台からの九十九島の景色を楽しんだ。九十九島は、60の島々が田園地帯に浮かんでいるように見える象潟独特の風景。由来は、鳥海山にある。紀元前466年の山体崩壊で山頂から滑り落ちた巨大岩塊の集積で「流れ山」と呼ばれる小山が海の中に浮かぶ入江を形成。芭蕉が、俳句を作ったのはこの風景。



その後、1804年、象潟大地震により2m以上隆起し、干潟を形成。それを開墾して現在の姿となる。このため、国指定の天然記念物「象潟」(九十九島)となっている。

予定外の登山中止ため、2日目の宿は、観光協会の紹介で「サン・ねむの木」とした。

少し古いが安価な公的な施設。地の魚の刺身、煮魚、地の煮物などお値打ちだった。宿泊施設を地元事情に長けた観光協会に聞くのも良いと思った。防風林が冬の季節風の強さを想像させた。

仁賀保岩ガキは、夏に採れる。これは、鳥海山の栄養に富んだ豊富な湧水が魚介類を育むためと言われている。漁師が山に木を植える時代。環境サイクルが大切。



○3日目 本日は、象潟から酒田、鶴岡、山形を経由し、蔵王温泉までの行程

庄内平野の米の集積地・酒田は、最上川が日本海に流れ込む河口部に位置する。河口部には、港繁栄の遺物が点在する。日和山公園には、日本最古級の木造六角灯台や千石船(1/2)があり、湊の風情を醸し出していた。また、山居倉庫(明治26年に作られた米保管倉庫)は、白壁・土蔵造り9棟からなる倉庫群。夏の高温防止のため背後にケヤキ並木を配している。

現役の倉庫と大きなケヤキが調和し絵になる景観。ほっとする風景で気に入った。

3千町歩の田地を持つ日本一の大地主だった酒田本間家邸宅跡を見学。

海上輸送の主ルートは、昔、日本海だったと思わせる遺物だった。



鶴岡では、今人気のくらげ水族館(鶴岡市加茂水族館)。この6月に改装オープン(3,000㎡)。

クラゲ展示種類でギネスブック。日本海の断崖の上に立つ癒しのスポット。親子づれで賑わっていた。



山形自動車道経由で蔵王温泉に向かう。温泉は、宮城との県境近く。蔵王連峰の西山麓。標高880m。本日の宿舎(高砂屋)に荷物を置き、蔵王温泉、最奥の溪流沿いにある大露天風呂に出向く。スキー場のゲレンデとゲレンデの間の谷筋に湧く。硫黄の匂いが立ち込める。湯は、白濁し、湯

ノ花も浮かび秘湯の趣きもある。湯の町の街角から幾筋かの湯けむりが立ち上がる。

私は、大露天風呂以外に昔ながらの旅館が立ち並ぶ「上湯」と温泉神社入口にある「川原湯」の共同浴場をはしごする。

高砂屋の夕食は、気さくな女将も加わり、楽しい宴会となった。花笠音頭の歌・踊りも加わった



○4日目 本日のハイライト、立石寺（山寺）。芭蕉の著名な俳句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」の立石寺。1070段の石段。登りました。断崖に立つ五大堂からの眺望・・・絶景です。

岩に岩を重ねた山姿。松、杉、檜の古木。苔むした岩。蟬も鳴いていた。観光客が多く静寂は、余りなかったが、芭蕉も称賛した景勝地。むべなるかな。下山して門前町で「板そば」と「ずんだ餅」を食した。板そばは、でかい。満足。



この後、蔵王エコーライン、ハイラインで蔵王の御釜に向かう。雨霧のなか山頂に向かう。

到着したら霧がはれ雨も一時的に小振りとなった。御釜は、刈田岳など3峰に抱かれた火口湖。湖面は、エメラルドグリーンで荒々しい火口壁と対称的。コマクサも見えた。



風雨が強くなった。下山し仙台空港に向かう。

仙台は七夕だったが、時間がなくパス。レンタカーを返し仙台空港で食事。ピーチで関空へ。到着時間が遅れ全員が船津邸で仮眠。

今回の山行は、鳥海山に登れなかったこと。残念であつたが小西さん、船津さんの周到な準備もあり楽しい4日間であつた。感謝。鳥海山は、動かない。捲土重来。

(写真提供 小西)

山での出来ごと

藤本孝雄

(一) 指すは鳥海山

一度は登りたいと思っていた「鳥海山」。

今回、その夢が叶うはずでした。搭乗券を早めにゲット。リーダーの綿密な登山計画に基づくミーティング。日を追うごとに気持ちは昂ぶるのです。

その日に備え、里山（殆ど額井岳）に登り体力維持に努めました。

その甲斐あってか日毎に、体調は万全。何の不安も無く、今回の山行に参加する準備は整い、8月4日を待つのみ。

(二) 出発の日

当日の朝は雨。駅には笑顔の七人が揃いました。八木から関空まではリムジンバスを利用し定刻に到着したのですが、少々急いで搭乗完了。MM31便、仙台空港行きの機上の人となりました。

機内は満員の状態で、私の席は、機内中央付近通路側、シートは、狭いとは感じず少し前屈みの体勢でしたが、約1時間30分のフライトは短く感じました。

(三) 見た震災の爪痕

仙台国際空港には定刻に到着。好天で迎えてくれました。本日の宿「大平山荘」まではレンタカー二台に分乗して移動。高速道路に入ってすぐ、道路を挟んで左右の建物や田畑の状況が全く違うことを咄嗟に気が付いたのでした。山形方面に向かって右側の海辺側は、背の高い松の木が数本見え、建物は見当たらず、田畑は荒れ放題、に対し、向かって左側は、田畑と草木が茂っているが、民家が数軒建ち並ぶ状況で、高速道路を境に、これだけ相異なる場所とは、まさか？車内に「震災があった場所や」と小さな声が聞こえた。人の姿は見えない。無情にも高速で車は過ぎて行くのです。この情景を目の当たりにして「自然の怖さ」を再認識した私達でした。「頑張れ、諦めるな」。次第に、この情景は遠くなり、鳥海山へ思いを馳せたのでした。

山小屋までは、混雑も無く、鳥海山、残雪の月山の雄大な姿や、周りの美しい景色を見ながらの意義あるドライブでした。

(四) 山小屋に於いて

山小屋利用での基本、早着きの予定でしたが午後四時過ぎに、到着しました。この大平山荘は鳥海山、山岳道路を車で少し登った位置にあり、日本海を見下ろす景色の良い山小屋で、二階の六畳ほどの二部屋を指定され、各部屋に落ち着き、ほどなく夕食の準備が整い、一階の食堂へ。

まず、今日の無事を祝し乾杯、明日の予定を確認しながらの食事。献立ては、洋食に近い温かく美味しい料理で、体調は良く完食。

午後10時ころに、準備万端、明日に備え就寝しました。(ほんまでっせ)

就寝時も私の体調には異常はなく、静かに眠りに就きました。

(五) なんでやねん！

朝5時ころに目が覚め、布団の上に座ったときに、腰と臀部に、少し、だるさを感じたのです。あまり気にせず、ストレッチをしようと起き上がったときの事です。腰付近に激しい痛みが走り、同時に右足膝に力が入らないのです。

「なんでやねん」と心中、穏やかでなくなり、早く治さないと登れないと直感し、無理に立ったのですが、右足は摺り足でやっと歩ける状態でした。今のいままで想像出来なかった、このアクシデントに狼狽して「なんでやねん」と言う強烈なショックを受けたのです。この状態が続くと、皆さんに迷惑をかけること間違いなし。早く回復して、元気に行動したい。その一心で、足の屈伸、又割、階段の上り下りを試したのですが、回復の兆しは一向に有りませんでした。ただ、両肩に三^{キロ}ほどの重さのザックを背負うと、五～六歩なら痛さが軽くなり、歩くことが出来ることが判りました。

登山開始予定時間になり、決断のときが来ました。私は、今の状況では登山は無理と判断して、皆さんと、今後の行動について忌憚のない意見を交わしました。その結果、私も車で鉾立登山口まで同行する。そこで症状に改善が無ければ、登山を諦め、一台の車で大平山荘に戻り連泊。4月6に下山した皆さんと合流することに決定したのです。しかし冷静に考えて、この時点で私が運転する事は無理な状況でした。原因不明の腰痛のために、この選択は断腸の思いで、心の中では、こみ上げてくる思いがありました。残念、「なんでやねん」。

ところが、登山口へ行くため、山荘の階段を一步、一步、下り始めた時、にわか雨が降り始めたのです。この時点では、皆さん天気の回復を信じ、車二台に分乗して出発。ところが高度が上るほど、風雨が激しくなりましたが、誰も登山中止の言葉は出ませんでした。

雨音だけが激しく車窓を打つ状況に、私は、この激しい風雨のなか、今の体調では、登山は無理と自分の気持ちに決断を下しました。

その反面、私の何処かには「何とかして登りたい」との思いが、残っていたのでした。その、私の思いとは、を正直に書きますと、実は「今日の山行は中止にならんかなー。予備日の明日には、体調も天候も回復するかも」と、心の内で、くり返し願っている私が居たのです。悪い男でした、ごめんなさい。

(六) 決断と心の願い

ほどなく鉾立登山口に到着。風雨は、より激しくなり、多くの登山者が途中で撤退して下山する状況でした。雨空を見上げながら、「雨はもう、やむで」「風は弱くなった」など、登る気いっぱいの中、リーダーが、皆の意見を聞き、途中から撤退してきた登山者からも状報を収集して熟慮の末、登山中止を決断したのでした。この判断は正しい勇気ある判断であったと思っています。

元宝塚歌劇団、真琴つばささんの言葉を借りると 「諦めるのも一つのゴール」

近くの展望台から、雨に霞む鳥海山の頂きを望ながら、掲示されている「登る勇気よりやめる勇気」の山登りの基本の大切さを再認識した次第です。

鳥海山、また、来るからな「八剣山の会」有難う

結び

中止決定後は、事前に作成して頂いた、計画表のおかげで、沢山の名所、旧跡を有効に回ることができました。有難うございました。

私ごとですが、先日病院での精密検査結果は、病名は坐骨神経痛と診断されました。現在は、ほぼ元通りに回復し、次の山行に備えています。あの出来事はいったい何だったのでしょうかねー。今回、参加した中でも、私は歩く動作が遅く、グループとして付いて行けないことを感じました。今後は、より身の丈にあったコースに参加したいと思います。有難うございました。

＜ブナの森＞ 鳥海山



○「かんあおい」

ウマノスズクサ科の常緑植物である。その濃い緑色の葉に魅せられて久しい。関東以西の森林や植林の下草があまり生い茂っていない緩斜面に自生している。この近辺では大峰山系や三峰山など関西の低山では何処にでも普通に見かける。また地方により葉の形にはかなりの変化があるようだ。

庭の植木鉢で長い間育てているが、意外に丈夫で、土が凍結するような冬の戸外でも枯れることがない。上手に育てると鉢全体を覆うくらいに茂って自生地のものよりも見ごたえがある。鉢の置き場所は直射日光が長時間あたらず、風の弱い所でしかも明るい日陰がもっともよい。

花は独特な形をしていて、一度見ると忘れがたい。春になるとまるで巣のなかで一斉に餌をねだるひな鳥の口のような、小さくて肉厚の地味な花を葉の根元付近に沢山つける。色は渋い緑色をしたものや褐色のものがあり、形にも少しずつ変化があってなかなか味わい深い。花を見るには葉を指でかき分けなければならない。花期は以外に長く、我が家では早春に咲き出し春本番になる頃まで咲いてくれる。花が咲き出すのは、辺りはまだ寒く草木も芽を出していない頃で、この花を見ると真っ先に早春の気配を感じる。

しかし「かんあおい」の本当の魅力はこの地味な花に有るのではなく、葉にある。ことに初夏から夏にかけてが一番美しい。まず葉の形が（ハート型）であること。そして草丈が低いこと。次に濃緑色の艶のある葉と表面にある模様、すなわち銀緑色をした「斑（ふ）」の魅力であろう。

樹林の中であちこちに点在している「かんあおい」の葉をよく見るとそれぞれ違った斑が入っている。細かく見ると千差万別である。縦に一文字筋状に入ったもの。雲紋のあるものや、網目状になっているもの、斑は無い代わりに葉脈に沿って淡色の現れるものなど。そして葉の大きさや形も微妙に異なっている。

地域によって「ヒメカンアオイ」と呼ばれている葉の大きさが3cm位の小さなものから8cmを超える大きなものまでである。短い葉柄の色は暗紫色のものが多く見られる。山道で「かんあおい」の群落を見かけると思わず立ち止まって眺めてしまう。昔は＜採集＞もしたが最近では「やはり野におけスマイレ草」の心境になっている。

山野草を育てていると最初はあれも、これもとコレクターに落ち入りやすい。私も今では人に分けてもらうか園芸店などで偶然見つけて買って来る程度である。それが機嫌よく育って殖えてくると楽しみである。山野草の中には、いつの間にか消えてしまったものや、辛うじて生きているもの、何故か何十年も生き続けているものもある。

「かんあおい」は丈夫だと述べたが、水切れになると驚くほどぐったりしてしまう。こういう時は鉢の表土が白っぽくカラカラに乾いている、しかし水をたっぷりやると直ぐにもとの元気な姿になってくれるので頼もしい。

ともかくどんな植物でもその顔色を注意ぶかく伺いながら世話をすることが大事なようで物を云わない生き物とながく付き合うのは全て同じように根気のいることである。時々顔色を伺ってないと草が何かを語りかけていることをつい見逃してしまう。蛇足ながら盆栽などは時々手で撫でたり＜話しかけたり！＞してやるといい盆栽になるという。松の盆栽などは酒をかけてやると良いツヤが出るらしくかなり贅沢なものである。カイワレ大根にモーツァルトを聞かせる実験などがあるらしいし、音楽を聞かせると植物がよく成長すると言われるようにもなってきたが、これなどまるでワインやウイスキー、牛並みである。どうやら植物も単独で生きているのではなさそうである。

「かんあおい」は、斜面に腐葉土が堆積しているような通気性のある場所に細くて長い根を張って生活をしている。

したがって鉢植えの場合は水もちが良くしかも水はけの良い用土を選ぶことだ。山野草のための用土もいろいろ種類があるようだが、カンアオイはあまり用土を選ばない。私の場合は主に桐生砂と赤玉土を混ぜて使っている。

「水遣り三年」とはよく云われるが・・・

水のやりすぎは殆どの植物を育てる場合避けるべきであって、なるべく乾燥気味に育てるのがコツである。理想は朝に灌水することである、陽が高くなると水分を蒸発させながら生育し、植物が一番育つのは夜であることを考えると、夜を迎え朝までに乾燥させる、これが理想の水遣り。とくに鉢植えでは表面に加え周りからも乾燥するので水遣りには注意と観察眼がいる。

また水遣りは植物の根に水分を与えるということだが、実は水に含まれる酸素をやっていると云われる。同時に鉢の土の粒子の中に溜まった不活性ガスなどの有害な物質を水とともに押し流すという行為でもある。従って水を遣るときにはタツプリと鉢底から溢れるまでやるのが大切である。また根にやるのと同時に葉水（はみず）といって葉の表面に灌水や水を噴霧することも大切である。

葉からも水を吸収するし、植物にとって大切な空中の湿度をあげたり、葉の温度を下げたり、害虫を洗い流したりして葉を洗浄することで葉の呼吸を助けるなど植物にとっては嬉しいことである。このような灌水をする道具としては目の細かな如雨露（じょうろ）が適している。ただ＜恵みの雨が＞一番良いことは云うまでも無い。

余談だが如雨露はポルトガル語の「**jorro**」から来ているとか。

そして鉢を置く場所（植物が生育する環境）はさらに大切である。家の狭い庭でも場所によって細かな気象（微気象）！の違いがある。日当たり、半日陰、あかるい日陰、陰、風当たりや風通しなどである。当然季節と時刻によってこれらは変化するので、そこで育てる植物の性質を知っておくことが肝心である、出来ればその自生地を知ることである。

戸外に植物をおく場合は気象をよく観察してその場所が本当に良いのか？ 季節によって変える必要は無いのか？ 真夏はあるいは冬はどうか。また植え替えした時にはどうか？ など注意をする必要がある。植物にとってこの環境の許容幅に入っているかどうかによって失敗したりよく育ったりするのである。とくに初めて育てる時には植物に相談するしか方法はない。

これらがうまく行った時には植物の機嫌がよく、沢山花をつけたり殖えてくれるので、こうなれば思う存分園芸の楽しさを味わうことが出来る。

「かんあおい」の肥料は畑用の魚粉をメインにしたペレット状の有機肥料を時々やっている。自生地では腐葉土壌から間断なくさまざまな栄養素を吸収していると思われるが、人工的な鉢の栽培ではどのくらいの栄養素を継続してやるのかが工夫のしどころである。山野草の肥料についてはいろいろ蒔蓄があるようだが、遅効性の肥料を少量やるのが基本で、季節や生育過程によって違うし野草の種類によっても色々工夫をすることになるが、これもまた園芸の楽しみの一つである。

「かんあおい」は種子のほか主に地下茎で増える。こまめに枯れた葉を取ってやると、新しい葉が出てくるので殆ど手のかからない野草である。

伊勢志摩にある朝熊山の「ひめかんあおい」は葉が小さいのが特徴で、青くつやのある葉が蜜に茂って見事である。この葉にも斑点のような白っぽい斑がある。葉の大きさは2 cm位の大きさである。他の地方にも「ひめかんあおい」と呼ばれる種類が有るようだ。これも私の好きなものの一つで現在元気に増えてくれている

○「ふたばあおい」

フタバアオイはかんあおいと同じウマノスズクサ科の植物で、かんあおいが常緑なのに対してふたばあおい（双葉葵）は落葉する。ギフチョウの食草だというが、この辺りには残念ながらギフチョウは居ないようだ。我が家ではどうやら小さなカタツムリが食べている。

このフタバアオイと云えば

古くは徳川家の家紋「葵のご紋」として有名である。「葵（あおい）」はウマノスズクサ科「かんあおい属」の総称である。徳川の紋所で有名な「三葉葵（みつばあおい）」はこのフタバアオイを図案化したものである。フタバアオイの通常の葉の数は二枚であるが紋所では三つ葉になっている。しかし四葉のクローバが珍しいように三つの葉をもつフタバアオイもあるらしい。我が家の鉢で育てている中には今のところなさそうである。

もともと京都の葵祭に見られるように下賀茂神社のシンボルになっている。その賀茂氏との繋がりが深い三河国の武士団は、葵紋を家紋としてきた。このことから三河武士である徳川家が葵紋に使ったらしく、京都で葵祭りと呼ばれるようになったのは江戸時代の元禄7年だそうで、下賀茂神社で長い間途切れていた葵祭りを復興するため徳川幕府は財政的な支援を行ったという。

葉の質は「かんあおい」よりやわらかく、葉の色も浅い緑色をしていて葉脈が美しい。特に春になって一斉に新葉が出てくるときは特に見応えがある。花はカンアオイと違って柔らかい小さな釣鐘のような形をしていてすこし鮮やかな薄い赤紫色である

京都の葵祭りでこの葉がシンボルとなったのも古人がこの生命力とハート型の可愛らしさを愛したのだろうと想像し楽になる。

葵祭りに参加する牛車や人々は頭にフタバアオイの葉をつけて行列にしたともいう。

葉柄はかんあおいよりも赤味を帯びている。この他「ウマノスズクサ」という花の形がとてもユニークな植物について また機会があればご紹介しよう。

（終り）

私の余生は老い仕度（その7）

2014.8.25 須藤 和雄

拙文(その1)～(その6)までを通読して下さった読者から納得できる論評を頂戴いたしました。有難う御座いました。

私の個人的見解ですが、『ごく普通の記述』です。
読み手に詩情的な感動や感激等を与えるものでも無い様に私は思います。

初めて受けた論評を嬉しく思い、何とか意に沿う様にと考えてみました。
結論、ご期待に応える事は出来ません。私の能力不足です。

そこで「私は何故、投稿するのか？」を素直に述べてみます。

- ①少年時代より続く「作文下手」から脱皮したいと云う思いがずう～とあった。
- ②会員の提案で発足した会誌に取敢えず「お付き合い」投稿を、と思った。
- ③飽きっぽい性格なので内容自由の「シリーズ物」としてスタートした。
- ④話下手なので今も山道等での「話ネタ」にでもなればと思って投稿している。

前置きはこの位にして前々回の拙文(その5)の文末で

ちょっと大風呂敷を広げ過ぎた嫌いが有りますが更に広げて次回以降で
【日本の心＝「和」の精神(日本人の伝統的価値観)】とか、
【日本における死生の行方「あの世」はどこある？】
【自然の中のスローな暮らしを考える】辺りの記述を試みたいと思います。

と書きましたが今回は無謀な事と知りながら『死生の行方「あの世」』について言及して見たいと思います。

★2000 人を看取った在宅ホスピス医(終末期医療医)が語っています。

- ・一般的に死を忌み嫌うのは「とらえどころのない未知の世界」に放り出されると云う不安、恐怖による。
- ・死を身近に感じる人は死後の世界を信じ幻覚時に親しかった物故者の姿を見る。
- ・死んで真っ先に会いたい人は「先に逝った母親」が圧倒的に多く、先に亡くなった配偶者等ではない。
- ・死がすべての終りではなく次の世界への通過点に過ぎないと見ているらしい。
(この事の証明は出来ないが間違いないと実感している)

★かつては暮らしの中に「人間の死」や「あの世」が身近にあったと思います。

子供の頃、お盆に寺に参ると本堂に「地獄絵図」が掛けてあり祖母に「嘘をつくな、舌を抜かれるぞ～」と脅された記憶があります。確かに「あの世」の存在を前提とした多世代同居時代の世代間の伝承と思います。

最近読んだ、島田裕己著「人はひとりで死ぬ」の中で～
個人を縛る「有縁社会」から孤独死に繋がる「無縁社会」に急激に変わった。
ここでは伝統的な家族制度や地域共同体が崩壊し冠婚葬祭も形を変える。
「おひとりさま」が目立ち、無縁死が増える。

また従来の「終活」が見直され、生者に依存しない死「ゼロ葬」の動きも出て来た。

[宗教学者の島田裕己氏 簡略化した葬儀「0（ゼロ）葬」を提案](#)

ここに至ると「人間の死」や「あの世」に関する受け取り方が大きく変わりつゝあると思います。

◎死後の世界に対する概念には「結論を持たないまま生きてゆく事を好む」
日本人の「懐の深さ」と関係があると云う論者もいますし・・・
ああ～溜息ものです。

★すつんと腑に落ちた「死生の行方」に関する著述を転記紹介します。

【臨死体験のある名男優「丹波哲郎」(1922～2006)の最後のメッセージ】
死後の世界を信じる事の出来ない者もいる。そんなヤツにはこう言いたいな。
「君はどうすれば愛が信じれるか、どうすれば人間が信じられるかを熟考し、その理由を完全に納得してから愛を信じ、人間を信じるかい？
そうじゃないだろう。信じたいと思うから信じ、信じなければいけないと思うから信じるんじゃないか。死後の世界だって同じだよ。死後に世界があり、生命は永遠だと思えば、人生観も変わるさ。この世で望んだ事がたとえ叶わなくても、それも修行と思えばいいんだ。自分の運命を嘆く事もないし、誰かを恨む事もなくなる。
この世とあの世がつながっている以上、この世の言動はすべて、あの世に伝わるのさ。現世での生き方が重要なんだ。
と言っても特別な事をする必要はない。明るく、素直に、あたたかく。
心に愛を育み、他人にそれを降り注ぐ事だ。そうすれば、快適で素晴らしいあの世が待っているぞ。」



宗教、哲学、文学、民俗学などから遠く離れた暮らしを続けている浅学非才の私がこんな大きなテーマに触れた事を「面の皮が厚い」と恥じております。皆さんから叱咤、反論、お導きをご教示頂きたいと思いつゝ筆を置きます。

(ちょっと一言)

築山 節『著脳が冴える 15 の習慣』にこんな記述がありました。

- ・頭の回転を速くするには時間の制約をつける
- ・脳の持続力を高めるには、家事をするのが良い
- ・物の整理は思考の整理に通じている。忙しいときほど片づけを優先させる
- ・仕事で混乱したときは、机を機能的に整理することから始めると立て直しやすい
- ・使える記憶を増やすには、出力することを意識して情報を取ることが大切
- ・その出力の機会を増やすために、報告書やブログを書くが良い
- ・書くことによって情報を脳に刻み込み、まとめをしながら考える等など

いずれも記憶・集中・思考力を高める為の暮らしの工夫(心掛け)と思います。

この「八剣山の会春秋」への寄稿は私にとって良いボケ防止策になっていると喜んでいます。

(もう一言)

ここで気が付いたのですが「大風呂敷」はボケる暇を与えてくれない。

これも単なる「山歩き」だけで満足することなく、会誌春秋作りに挑戦している我々が紡ぎつゝある効用です。

「大風呂敷」に包み込むものを探したい、と云う意識で毎日を過ごしていると

日々の暮らしはネタ(情報)に満ち溢れていて、メモをとることも時々。

物書き稼業の先生方と違って筆過があっても誰からも叱責されない、暮らしを支える収入に関係なし、こんな気楽な立場はめったに有りません。

(更にもう一言)

2010年2月4日に命名した『八剣山の会』は「自然と触れ合う醍醐味」を求めて集ったグループです。そして色々な思いを載せて2013年3月20日に創刊の会誌「八剣山の会春秋」があります。

しかし、何れもがその役目を終えて、寿命が必ず来ると思います。

どの様な道筋で自然死を迎え「あの世」へ送ったら良いのでしょうか。

(つづく)



写真俳句

本山裕昭



(第四十五番 岩屋寺)



(道後温泉本館)

お遍路を
終えて道後の
坊ちゃん湯
凡太



(金毘羅宮)

桜咲く
金毘羅の磴
やーとーせ

花の先

今は穏やか

熊野灘



(熊野古道小林峠)

あな嬉し

鈴鹿の盟主

登り切り



(御在所岳頂上)

この町に住んで36年（その3）

2014.7.30 金城清三

平成12年9月満60歳となり定年。申請すれば雇用延長も可能であったが、年金は60歳から支給されるし、そして通勤苦からの解放も望んで勇退？することにした。郷里沖縄で商業高校を卒業、現地の製糖会社に就職してから42年間の平凡な勤め人稼業は大阪の小さな商事会社で終えた。古里へ帰ることも考えてないので、余生はこの榛原に託すことにした。

定年は、長年の通勤苦から解放される喜びはあるものゝ、再就職のことは考えてないし、具体的な目標をもっていただけでは無かった。健康を維持するためにはジョギングを続けることと、大和の国の歴史と自然に恵まれたこの環境で、習い始めた俳句作りもいいなあ、とその程度のことを考えていた。

そんなある日、旧知のサットンこと里中さんに会い、現況を話したら「団地の仲間で山歩きしているのだが、どうや？」の話。詳しく聞いてみると、同世代の男達が毎月、周辺の山歩きを楽しみ、下山後は反省会と称して皆で一杯やっているとのこと。飲助としてはこれは聞き捨て成らぬ話。『お世話になります。仲間に入れて下さい！』その場で入会を申し入れた。そして、その月の例会から参加した。幸いに険しい山歩きでなくハイキングのような平地のコースであったので、私の足でも付いていけたし反省会も又楽しかった。

仲間には、この奈良近郷の山だけでなく近畿、信州の山々、そして全国の山や雪山も楽しんでいる人もいる。中には日本百名山を踏破した猛者もいるのだ。これは良い仲間巡りに巡り合えた。あちこち連れて行って貰おう。奈良県は山国であり、住んでいる宇陀地方も山に囲まれた土地柄である。にもかかわらず、山歩きや登山には縁がなかったので、これは良いチャンスである。

この山の会では、近くの宇陀は勿論、奈良、大阪、京都の山を始め、場合によっては信州にも足を伸ばすという。地図を買ってきて、調べると裏の額井岳は「大和富士」とも呼ばれていることや家の前に聳える三郎ガ岳、高見山のことも知った。よく知られた葛城山や金剛山の名もあり夢が膨らむ。

この会で経験を積んだら日本百名山にも名を連ねる信州の白馬岳や御嶽山などにも登れるのでは？ 高所恐怖症の我を忘れて夢が膨らむ。

しかし、登山を本格的に始めるには、経験もないので、それに必要な用具を用意せねばならない。登山具の店へ行って調達することにした。

登山靴、リュック、登山杖、雨具、登山服など買い込む。ほとんどゼロからのスタートだから、かなりの出費ではある。それでも要る物は要るのだ。

冬には高見山とか三峰山など雪山登山もある。アイゼンなどの冬装備も用意しなければ・・・。月1回の行事に参加し先輩の指導を受けながら足を慣らし近

郷の山々に登るようになった。高見山・大台ヶ原・葛城山・金剛山・鎧岳・兜岳・二上山等々。毎月のように参加した山歩きは楽しい。途中でへたばっても山頂からの眺めが素晴らしく、これまでの苦労も吹っ飛んでしまう。そして思わぬ収穫もあった。四季の自然に接する山がらみの俳句作りである。山行を終えて帰ってからも、それを纏める楽しみが待っている。。

その頃、長年俳句の指導を受けた片山多迦夫先生から、「万葉の地で余生を連句や俳句で過ごしたい。奈良に相応しい場所はないか」と、問い合わせがあった。先生は奥さんが他界し、兵庫県の川西市で独り住んでいた。そこで2, 3の候補を挙げて薦めた中から、先生が選んだのが、わが団地にあるケアハウス「ゆあほうむ榛原」であった。引っ越しの手伝いに部屋を訪ねたら、「凡生君、このケアハウスで句会を立ち上げよう」との仰せ。まもなく「ゆあほうむ榛原」で片山多迦夫主宰の「あしべ俳諧塾榛原教室」が開講した。そして私が幹事役を引き受けることになった。

こうして定年後、はからずも山歩きで団地の仲間を知り、俳句で再び師匠をわが町に迎え、山と俳句で余生を楽しむ体勢ができた。以下山歩きと俳句のコラボレーションである。

山と俳句20句

凡生

奥駆けへ弾む心や登山口	鎖場を抜けて山頂雲の峰
若かりし芭蕉の句碑に青葉風	山の辺に匂ひ漂ふ栗の花
花冷えの法話のあとは般若湯	花の信貴我も善男詣でけり
霧の中大台ヶ原逍遥す	万緑の中や鹿の子の首細く
稲の秋男綱女綱の飛鳥川	雄岳陰大津皇子に笛子鳴く
万葉の飛び石渉る稲の秋	黒々と明日香古代の稲穂とか
七夕や大台ヶ原雨の闇	沢に濡れ岩につまづき登山靴
疲れなし紅葉山から紅葉山	行く秋を曽爾高原に惜しみけり
冠雪の烏帽子を目指す高見山	比叡越へ京も近江も春霞
郭公や尾瀬の木道七曲り	その歌に誘われ尾瀬へ水芭蕉

この町で過ごして36年、定年後の余生も仲間に恵まれて山歩き、師に恵まれて俳句を作り楽しんでいるのだが、4年前に古希を迎えていよいよ老境、これからは体力の衰えも自覚した山歩きを心がけなければ……。そして宇陀の素晴らしい自然と関わり合いながら余生の俳句も楽しみたいと思う。山仲間の皆さん、今後ともご交誼のほど、よろしくお願い申し上げます。

編集後記：全国的に大雨に泣かされた夏でしたが、幸いに宇陀地区とその周辺には大きな被害は無かったように思います。9月。我が団地をかこむ額井や赤瀬の田んぼではく実るほど頭を垂れる稲穂かなの景があちこちで見られるようになりました。又、農家の裏の畑には栗の実もたわわに、実りの秋がいよいよ本番を迎えております。人であれば私達の年になると人生の秋に例えられます。しかしそれは黄昏の秋でなく、充実した人生の実りの秋としたいものです。

「春秋誌」の編集の狙いもそこにあるのですが……。▲須藤さんの力作「私の余生は老い支度」も今号で7作目となりました。タイトルは「老い支度」とは言え、その文章に一貫して流れるものは、活力を持って老いの今を楽しく、仲間と共に充実したものしたいとの言行一致の姿勢です。人生の黄昏とはとても思えない姿勢にはみなさんも大いに啓発されるのではないのでしょうか。▲安田さんから初めての寄稿がありました。「東北旅行（鳥海山登山）報告」がそれです。楽しく読ませていただきました。日記風に書いてありますが、単なる記録に終わらず、この旅への安田さんの期待と関心の深さを感じました。残念ながら天候の都合で鳥海山への登頂はなりませんでした。でも素晴らしい旅に私は羨ましく思いました。その文章には詩情もあって読み手を退屈させない「書く力」がありました。「捲土重来」を誓って締めたのも良かったですね。お疲れさんでした。▲「春秋」誌もこの秋季号で8号となり満2年となりました。日頃のみなさんのご協力に編集委員一同感謝申し上げます。なお、今回は別冊「写真特集号」と同時発行を試みました。本誌と併せてお楽しみください。▲編集には関係ないことですが、先日＜ウエルネスシティ宇陀市＞の提唱する「おはようラジオ体操会」に参加しました。これは8月から1年間、毎週火曜日、7時から実施している行事です。わが山の会の野田さんの元気な号令で、秋晴れの下、老いの身をほぐす楽しい体験でした。参加は自由ですから、皆さんも、＜健幸＞の為にご参加いかが？場所は天満台公園です。先日の参加者は40余名でした。須藤・木山・薮・野田・金城（敬称略）が参加しました。＜秋高し老ひの体操一二三 凡生＞▲次号、平成27年新年号は原稿締切11月30日発行12月20日です。慌ただしい年末を控えた頃ですが、新年号にふさわしい希望に満ちた寄稿文の方もよろしく願い申し上げます。又、読後の感想や忌憚のない批評・ご意見もお寄せください。▲編集委員の増谷さんが体調不良の為退任したことをお知らせします。なほ編集委員ご希望の方はどうぞお申し出ください。

凡生
